

「空中幼虫」

積極的な攻撃手段を持たない蝶や蛾の幼虫は、いろいろな方法で敵から身を守ります。毒を持つ、何かに化ける(擬態)、悪臭を出す(アゲハの幼虫)などです。葉や枝からぶら下がるのも、幼虫が身を守る手段の一つです。

幼虫が天敵に襲われると(襲われてからでは遅いので、襲われる直前に)、当然逃げるわけですが、幼虫はどうがんばっても逃げ足が遅いです。そこで、位置エネルギーを一気に放出、真下に姿を消すわけです。しかし、地面にも敵は多く(たとえばアリの大群)、完全に落ちたらアウトです。そこで、瞬時に細い糸を吐いて、ぶら下がるわけです。もちろんそのままいるわけにはいかないので、糸を「手繰り寄せて」元の場所に一生懸命に登ってきます。

中には、マイマイガの幼虫(別名「ブランコムシ」=毒)のように、敵に襲われなくても「自主的に」糸を吐いてぶらさがるヤツラもいます。移動手段の一つとして使っているのです。小さな幼虫(一齢)は、そのまま風に乗って遠くに移動することもあるそうです。

クモの仲間にもそういうのがあると、小学生の時、国語の教科書で読んだことがあります。確か「流れ蜘蛛」と書いてありました。クモは積極的な飛翔手段を持たないので、糸の揚力を利用して、体重が軽い子グモのうちに遠くまで移動するというわけです。

小学校のそばで自然観察をしていて、子どもたちがこういうぶらさがった幼虫を発見すると、もう大変です。糸は細すぎてなかなか見えないのですが、「糸のありそうな場所」に指を出して、幼虫を糸ごとゲットするわけです。振動に気づいた幼虫は、更に下に逃げようとしますが、しばらくは空中に浮いたまま、子どもの指についてきます。子どもはその様子を、じ〜〜と観察しているのです。

そのまま振り落してしまうかな・・・とみていると、最後に木や草の枝にもどしてあげる子が多いので、ほっとします。

こんな危機的状況の幼虫からも、子どもも教師もさまざまなことを学べるのです。

こんな危機的状況の幼虫からも、子どもも教師もさまざまなことを学べるのです。

「幼虫とにらめっこ」

子どもにとっては、すごく面白い体験。幼虫にとっては非常に迷惑な体験。





「空中幼虫」 たぶんエダシャクの幼虫でしょう。どう目を凝らしても糸を目視できませんでした。そのぐらい細い糸を、自分の体長の何倍も瞬時に吐くのです。(北軽井沢)

(お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋)